

外国語教育・学習の新たな意義づけについて¹⁾

石上文正

(人間環境大学名誉教授)

1. 外国語教育存亡の危機——AI 通訳・翻訳がもたらす大きな波

自動通訳・翻訳は、ディープ・ラーニングの手法を採り入れた AI(人口知能)を用いることによって、その精度が格段に向上してきている。このことは、将来的に英語教育や通訳・翻訳教育の存亡の危機をもたらす可能性がある。とくに、外国語教育の目標が、外国語を用いて、外国人との意思の疎通を図るための外国語能力の獲得にのみあるのなら、なおさらである。

平泉・渡部(1995、p.28)のなかで渡部は、外国語教育の日本における始まりを聖徳太子の時代であると考えているが、この考えに従えば、AI 通訳・翻訳の発達によって、外国語学習や教育は、千数百年に一度の大きな変革の波に洗われているといえよう。

おそらく現時点の AI 通訳・翻訳の英語力は、多くの日本の大学卒業者の英語力(読む・書く・聞く・話す力)をすでに上回っているであろう。もしこれが事実ならば、小・中・高・大学で、膨大な時間を費やしてまで、英語を学習する必要があるのか、という疑問を抱く人があってもおかしくはないし、そのように考える人が多くなれば、学校における英語教育の存在意義さえも問われる事態になるであろう。現代は、外国語教育、英語教育の危機の時代である。

私は、外国語教育、とくに英語教育は重要で、残すべきだと考えている。ただし、従来の英語力(読む・書く・聞く・話す力)の獲得のためというだけでは、AI 通訳・翻訳が普及する未来にあっては、説得力が乏しいであろう。そこで、この小論では、外国語教育のそのほかの意義について考えてみたいと思う。なお、その議論のなかで、メディア英語研究のあり方についても、簡単に触れるつもりである。

2. 知的訓練のための外国語学習

今日、外国語を学習する人の多くは、外国語を話し、書き、聞き、読むことに習熟することを目的にしているであろう。しかし、外国語の学習には、別の意味も含まれていると考えられる。それは、知的訓練である。

2.1 思考方式の訓練

「外国語教育の危機の時代」にあって大事なことは、原点に返って「外国語教育とは何か？」を問い直すことであろう。この問い直しにおいて、多くの知見を提供してくれるのが、平泉・渡部(1995)であろう。この本には、基本的に二人の数回の議論が掲載されている。そこで、彼らの意見に言及・引用するときには、平泉・渡部(1995)ではなく、個別に平泉(1995)もしくは渡部(1995)とする。

平泉(1995, p.11)は、日本人の高校生に関しては、会話能力はもちろんのこと、「卒業の翌日から、その『学習した』外国語は、ほとんど読めず、書けず、わからないというのが、いつわらざる実状である。」という見解を示している。現代の日本においても、実状は同じであろう。

しかし、平泉の考えている問題認識は、AI 通訳・翻訳を用いれば、ほぼ解決できるのではないだろうか。ここが、本稿の出発点である。渡部(1995)は、語学教育について、外国語を「読み・書き・聞く・話す」ことができるようになるという技能以外の“意義”についていくつか注目すべきことを述べている。

渡部(1995, p.32)は、文字文化、とくに「読み・書き」を重視し、それは日本の外国語学習の伝統であり、「古来日本人が、外国人と話すという外国語習得とは別の外国語習得の仕方があるということを知っていたことは、決して失ってはならない知的財産であることを忘れてはならない」と述べている。もちろん他の「聞く・話す」を無視、軽視しているわけではない。

渡部(1995, p.35)はこの文字文化重視、読み・書き重視の意義として、次のように述べている。

少なくともそれ(戦前・戦後の外国語(英語)教育)は日本人に母国語と格闘することを教えたからである。単なる実用手段としての外国語教育は母国語との格闘にならない。その場合は多くが条件反射の次元で終わるからである。(カッコ内は筆者)

では、この格闘とはいかなるものか。渡部(1995, p.36)は、次のように「精神が精神を見る」という表現を用いている。

・・・格闘は猛烈だ。「象は鼻が長い」というありふれた日本語を英語になおすときに、どれだけの知的格闘を経なければならぬことか。日本語しか知らない時ならば全然意識しないことを、改めて意識にのせ、それを分解し、全く別の視点から組み立て直すのである。こういう風に外国語を学ぶことによってはじめて「精神が精神を見る」ということが起るのである。

そして、渡部(1995, p.41)は、「精神が精神を見る」ということは、「思考方式を訓練する」と次のように述べている。

異質の言語で書かれた内容ある文章の文脈を、誤りなく追うことは極めて高い知力を要する。また逆に、そのような作業を続けることが著しく知力を増進せしめうることは、歴史的にも経験的にも疑問の余地がない。それは基本的な思考方式を訓練する点で、数学に劣るものではないのである。

渡部は、数学と外国語文章の読解を比較しているが、ある意味で、外国語の文章読解のほうが複雑な要因や条件が組み込まれているため、より難易度が高いと考えることもできる。たとえば、外国語の文法ばかりでなく、文章における文脈や社会・文化的文脈、人間関係等、さまざまな要因を考慮しなければ、外国語で書かれた文章を正確に読み解くことはできないであろう。これはまさに格闘である。

外国語を日本語に通訳・翻訳するとき、さらなる困難が待ち受けている。外国語、例えば英語を“直訳”的に日本語に訳しても、それは自然な日本語にはならない。もし自然な日本語訳をめざすなら、今度は主として日本語との格闘が待っているのである。これらの格闘を通じて、知的な訓練が行われ、さらに英語に関する知識ばかりでなく、日本語についての理解も深まるであろう。

2.2 ディスコースの読解を通じた異文化理解訓練

私たちが目の前の文章を読解、つまり理解しようとすることは、そこに制作されている世界を理解しようとするのである。その世界は、なによりもまず、ことばという記号体系で制作されている。それは、さまざまな層によって構成されている。ただし、それぞれの層は、それぞれが関係しあっているので、ここでは分析目的に分けているだけである。まず、ことばそのもののレヴェルがあるだろう。当該言語の法則（文法）を理解し、その法則にしたがって言語記号体系を理解する必要がある。

別の視点から言語記号体系を眺めるとディスコース（言説）の層がみえてくる。「ディスコース」と呼ばれているものには、さまざまな定義があるようだが、ここでは私が考えているものに近い「ディスコース」について紹介しておく。心理学者のバー（1997、p.74）は、次のように説明している。

言説とは、何らかの仕方でまとまって、出来事の特定のヴァージョンを生み出す一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述、等々を指している。それは、一つの出来事——中略——について描写された特定の像、つまりそれないそれらのある観点から表現する特定の仕方を指す。

私は、上記の「ある観点」には、文化的、社会的、歴史的等のさまざまな要素が含まれていると考えている。例えば、「私は、その庭の花の周りに生えている雑草を抜いた。」という文を読解するとき、まず、書き手が「花」と「雑草」という分類・概念——おそらくこの分類は人が勝手に考え出したものであろう——をもち、雑草の方が花より価値が劣ると考えていると推測できる。つまり、このような文化的な要素を読み取ることができる。そして、この文化的な要素は歴史的なものであり、書き手はそのような文化的な価値観を実践していると解釈できる。

さらに、「ある観点」という言い方には、さまざまな「観点」の可能性が暗示され、そのうちの一つが選択され、それに基づいた文章構成になっていることが推測される。ある観点を選択するということは、そこに書き手や話し手の思想や考え方も入り込んでいることを示していると考えられる。

私は、上記の「まとまって」と「一群の」という言い方には、さまざまな文や句によって組み立てられている文章の結束性や一貫性、さらにそれなりの構造化を前提にしていると考えている。もし「一群」を構成する要素にまとまりがなかったなら、はっきりした意味を伝えることができないからである。

バーの定義には表現されていないが、ディスコースには、書き手や話し手の生きている状況も含まれていると考えることができる。書き手や話し手はいかなる状況にあり、誰に対して、何を訴えようとしているのか、というレヴェルである。Aさんは、Bさんと話しているが、実際はそばにいるCさんを意識して話している場合もあろう。また、Aさんは、Bさんに話しているようにみえるが、実際は、

自身の迷いを振り払うために、自身を鼓舞しようとして自分に話しかけているかもしれない。また、ある書き手は、権力者の検閲を常に念頭において文章をつづっているであろう。

例えば、国会の各種委員会の会議において、議員が政府を問いただすときに、パネルにわかりやすく図表などを書き、それをテレビカメラに向けるようにしていることが多々見られる。当議員は、政府関係者に向かって話しているばかりか、テレビの視聴者に対しても話しかけているのである。

ディスコースにはある世界が、ことばという思考しやすい形式によって「客体化」されていて、思考対象として存在するのである。その一つのまとまりのある文章、つまりディスコースを読解(思考)するということは、あまりにも困難で複雑な作業(格闘)である。外国語のディスコースの読解は、さらに困難な作業である。しかしその作業を通じて、その書き手や話し手の観点に出会い、彼らの創り出す「一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述、等々」という“異国の世界”を経験することになる。これは一種の異文化理解訓練であろう。²⁾

3. 「ことば」と「文化」の学習の一環としての外国語教育・学習

「人間とは何か?」という問いに対して、ことばの使用、文化の所有、高い知能、二足歩行、道具の使用などの答えが返ってくるであろう。このなかで、「ことば」と「文化」は人間を人間たらしめる重要なものであろう。つまり、これらについて知ることは、自分自身を理解することにつながるはずである。日本の小・中・高校では、これらについて体系的に教えているのだろうか。なお、本稿における「文化」とは、文化人類学者が用いる「文化」であって、「文化財」や「文化人」として使われている「文化」ではない。一般の人々の行動や考え方、価値観などと深く関わっている「文化」のことである。

まず、日本の学校では、「ことば」について教えているのだろうか? おそらく、下記のように、教えていないと思われる。

小学校や中学校で、「国語」「英語」は教科の一つとして教わります。でも、「ことば」という科目はありません。なぜでしょうか?

おそらく、ことばは誰もが教わらずとも使えるようになるものだからです。(加賀野井、2006、p.2)

渡部(1995、p.36)は、「日本の国語教育は、国語の文学的教育である」と断定しているが、たしかに、その傾向は認められる。また、国語の授業では、ことばの「使用」については教えているが、ことばとは何かを体系的に教えているとは思われない。

このような事情は、文化についても当てはまるであろう。「社会科」はあるが「文化科」というのはあまり聞いたことがない。ことばについての学習がないから、当然、文化がいかにことばと関係しているかについては、現代の生徒はほとんど学ぶ機会がないであろう。

おそらく多くの人々は、文化とは何かということを知ったとしても、文化は、実用的にはあまり役に立たないと考えていると思われる。それは大きな間違いである。「文化は、人間にとって〈第二の自然〉」(バーガー、1979、p.9)であり、文化には強い力がある。本来はおかしなことでも、当たり前のように思わせる力がある。例えば、紙幣というたんなる紙切れは、鉄やさまざまな部品で作られて

いる車と交換できる。これは、ある意味で文化の力である。また、文化は私たちの感覚的、認知的なものにも影響を与えている。生卵をごはんにかけて食べることを味が悪いと感じる外国人は多いようだが、日本人には少ないであろうし、英語の *lice* と *rice* の音の区別を容易にできる日本人も少ないであろう。これらは、広い意味で文化的な現象である。

文化はまるで空気のように当たり前の存在であるが、強い力をもって、そこに暮らす人々をある程度コントロールしている。文化について知ることによって、その実態を客観視することができるようになるであろう。私たちは、人生のさまざまな局面で、文化の強い力に圧倒され、苦しむことがあるかもしれないが、そのようなときに、文化は人間が作り上げたものであり、それを疑うこともでき、さらにそれを変えることができる、ということを知っているか否かで、進むべき道筋が大きく異なるであろう。私たちには、人間が作り上げた文化という〈自然〉がいかなるものであるかを知るための「〈自然〉科学」が必要であろう。

以下の項では、この大きな問題について、深く、広く、包括的に論じる余裕はないが、その第一歩になるような考えかたを示しておきたい。そして、さらにこれらの学習のために、外国語教育・学習が役に立つことについて論じてみたい。

3.1 ことばと現実世界—ことばの「虚構性」とその働き

ことばとは何か、ということについて述べることは難しい。さまざまなアプローチがあることもその理由の一つである。ここでは、私たちが生きているこの世界においてことばがいかなる役割を果たしているかについて述べ、外国語学習・教育の「新たな意義づけ」の第一歩としたい。

ことばは現実世界をそのまま映しているわけではないが、ことばと現実世界の間には何らかの関係があると考えられる。ただ、その関係は、文章のジャンル等によって異なるであろう。マニュアルや製品の取り扱い説明書などは、もっともこの関係が近い文章の一つであろう。

ニュースなどに記述されている世界は、“現実”をかなり加工したものであると考えることができる。ただし、なにをもって“現実”とするかは難しい問題であるが、ニュース記事自体も“現実”を構成していることは事実であるし、フェイク・ニュースと言われるものもある意味で“現実”を構成している、と私は考えている。このことについて、経済指標を例に説明してみよう。

ことばと経済指標はある意味で似ている。両者とも“現実・実体経済”と深く関係し、融合しているからである。失業率などの経済指標は、“実体経済”をある手法によって集計した数値であるが、その数値が発表されると、株式市場や外国為替市場が変動する。つまり“現実”の経済状況は、数字という記号によって示され、それを媒介にして、株や為替の数字が変動する。株価が下がれば、人々の経済に関する心的態度は低下し、それは“実体経済”の鈍化を招くであろう。このように経済世界は、記号と“実体”が融合している。私たちが生きている生活世界におけることばという記号と“現実”の関係も、おそらく事情はさほど違いはないであろう。

経済指標はある理論や視点から集計された数値であって、“真の現実”を写したものではないだろう。たとえば、国内総生産には、家庭内の家人による家事労働は入っていない。これは“生産”とは無関係ということであろうか。国内総生産に家庭内の家事労働を入れることが“正しい”か否かは議論があろうが、このような経済指標も「ある観点から表現する特定の仕方」に過ぎないのではないだろうか。しかし、これらの指標も、先に説明したように“現実”を構成する一要素でもある。

この数字が発表されることによって、さまざまな数字が変動しはじめ、それが人々の購買意欲や企業の生産計画などに影響を与えるからである。あるニュースが発信されると、それが“真実”であろうとなかろうと、人々はそれに反応する。つまり、現実が影響を受ける。経済指標の例と同様に、ことばも“現実世界”を「ある観点から」描いているといえるであろうし、“現実世界”を構成し、作り上げていると考えることもできるだろう。

「こころ」というものを見たことがある人はいないだろうが、多くの人はその「存在」を信じているであろう。おそらく「愛」や「気もち」も。しかし、これらはしっかり日本の“現実世界”を構成していると考えられる。

私が考えている「ことば」の体系的な学習は、大きく四つに分けることができる。第一にことばそのものの仕組みについて、第二にディスコースについて、第三にコミュニケーションについて、第四に人間・文化・世界とことばの関係について、学ぶというものである。第一から第三までは、よく知られているか、すでにある程度説明したので、ここでは省略し、第四についてのみ簡単に説明しておく。

ことばの不思議さをもっともよく示す考え方として、私をもっとも感銘を受けた一つは、哲学者の竹内(1981, p.90)の「言語は、有限の無意味な単位でもって無限の有意義な表現を不断に生産していく機構」であるというものである。後述するように、素材の世界は連続し、渾沌としているので、それを分節・分類する方法には、無限の可能性があろう。私たち人間は、ことばという有限の道具をもって、無限の世界に対峙しているのである。その対峙の“現場”は、いかなるものであろうか。このことばと世界の接点について考えるのが、本項のテーマである。

鈴木(1973, pp.33-4)は、ことばと素材の世界の関係について次のように説明している。

…ことばというものは、渾沌とした、連続的で切れ目のない素材の世界に、人間の見地から、人間にとって有意義と思われる仕方で、虚構の分節を与え、そして分類する働きを担っている。言語とは絶えず生成し、常に流動している世界を、あたかも整然と区分された、ものやことの集合であるかのような姿の下に、人間に提示して見せる虚構性を本質的に持っているのである。

これはソシュール(1972, pp.157-9)に似ている考え方で、なかなか難解な表現だが、私なりに簡単な説明をしておく。「渾沌とした、連続的で切れ目のない素材の世界」とは、例えば、身体を例にして考えてみよう。私たちの身体には「カタ(肩)」と呼ばれている部分があるが、どこかに線が引かれていて、はっきりと画定されているわけではない。つまり、首から「連続的に」「切れ目なく」肩に到達するのである。はっきり画定されていないから、「渾沌」としているのである。そのような「渾沌」に、ことばが「カタ」という「虚構の分節」を与え、身体が「あたかも整然と区分された、ものやことの集合であるかのような姿」として構成しているというのである。もっと恐るべき分節としては、日本語の「コシ(腰)」である。英語には、それと一致することばは無いようである。「腰」は本当に“ある”のだろうか。

もう一つ例を挙げておこう。夜空の星々は、渾沌として存在しているが、人間はそこにさまざまな

星座を創りだした。ことばも星座もまさに人間が創った「虚構の分節」である。

ことばが素材の世界に虚構の分節を与えるなら、ことばによって創りあげられた世界は、まさに虚構であろう。なお、この「虚構の分節」は、ソシュール(1972、p.98)の「言語記号の恣意性」と関係する考え方と思われる。

そのような虚構の分節は、私たちになんの益があるのだろうか。人間を迷わすだけではないのか、という疑問が生じるだろう。この点について鈴木(1973、p.40)は、次のように述べている。

素材の世界とは、渾沌とでも、カオスとでもいふべき、それ自体は無意味の世界であって、これに秩序を与え、人間の手におえるような、物体、性質、運動などに仕立てる役目を、ことばがはたしていると考えざるを得ない。

鈴木は、「虚構の分節」の果たす機能として、「秩序化」や「利用可能化(手におえるようにする)」を考えているようだ。つまり、ことばによって世界をわかりやすく、上手に利用できるようにしているというのであろう。ことばに関する上記の鈴木のとらえ方に似た考え方を社会学者のバーガー(1979、p.30)は次のように述べている。

言語という事実は、たとえ単独にとり上げられても、経験に秩序を課すものであることが容易に理解される。言語は、進行する経験の流れに分節と構造を課することによって規範化する。経験の項目が名づけられると、それは事実上この流れからとり上げられてその名どおりの実在として安定性を与えられる。

バーガーは、上記のように言語は経験を「規範化」し、その分節されたものが、なんの疑いもなく「実在」するように「安定性」を与えるというのである。なお、バーガー(1979、p.28)は「規範化」と「秩序化」をほぼ同義語として扱っている。

ことばは、私たちの身体を「カタ」や「コシ」などに分節し、秩序あるものとして組織化し、「カタ」や「コシ」が実在するものと私たちに思い込ませ、だれもその実在を疑わないような「安定性」を与えているのである。私たちの生きている世界は、このようにして安定的に維持されるのである。

私たちは、時間の流れのなかに、誕生日として「○年○月○日生まれ」という虚構の分節点を与えられ、さらに自分自身の名前をつけてもらい、空間のなかに現住所という分節空間が割り当てられることによって、「いつから」「なにもの」「どこに」ということが確定し、秩序のなかに組み込まれ、それなりのアイデンティティが確立し、日常世界のなかで安定性を与えられるのである。この逆の状態を表すことばとして「住所不定、無職」が考えられる。これらのことばの響きには、どこか否定的なものを多くの人々は感じると思われるが、これは秩序に組み込まれていない、カオスの状態を感じてしまうからであろう。

私たちが、ことばによって安定性を与えられるのは、ことばがあまりにも<自然>であるため、それが「虚構の分節」の“張本人”であることを忘れてしまうからであろう。おそらく、この「虚構」を<自然>と思わせているのは文化の力であろう。

もしもこのような機能をもっている文化やことばが消去されたならば、私たちはまるで意味ない世

界の中を、根無し草のように漂いはじめることになるだろう。おそらく、「世界」そのものも存続できないであろう。

3.2 ことばと文化による「虚構の分節」の例

ことばによる「虚構の分節」が事実なら、それぞれの言語がそれぞれの仕方で素材の世界という“現実”の世界に、「虚構の分節」を与えているということになる。つまり、言語によって分節の仕方が異なることになる。このことを“証拠づける”と考えられる具体例を鈴木(1973, p.43)が挙げている。それは身体の分節の差異についてであって、今ではよく知られるようになっている日本語の「くちびる」と英語の“lip”の違いである。

英語の lip は、赤いところだけでなく、口の周囲のかなりの部分をも指すことができることばだということである。ことに upper lip〈上唇〉とは、殆んど日本語の「鼻の下」に当たる部分を言うことが多いようだ。

このように、私たちは、外国語を学ぶことによって、ことばによる分節という虚構性を具体的に知ることができる。自国語による素材の世界の分節によって制作されている世界が真の世界であると、私たちは考えがちであろう。そしてその安定的世界に安住しているとき、外国語を学ぶことによって、その世界が虚構であることを思い知らされるのである。つまり、“現実”との関係において、ことばが虚構であるという認識によって、それによって形成されている文化そのものも虚構性を帯びているという考え方に至るであろう。

ここで、文化の「虚構性」についても触れておく。例えば、現代の日本人に、いつから「大人」になるかと訊けば、成人式との関連もあって、多くの人は「二十歳」と言うであろう。この歳が一つの基準であるが、坪井(1979, p.175)によれば、過去の日本では成年式が、「一三歳から一五歳くらいがもっとも多く、奇数を重んずる傾向がみられる」という。

また、現代の私たちが当たり前と考えている「子供」のイメージや概念がヨーロッパに登場するようになったのは、16、17 世紀あたりというアリエス(1980)の研究にもあるように、「子供」の存在そのものも当たり前ではないのかもしれない(アリエスの説には批判もあるようだ)。現代の子供の身体と似たような身体の子供は 11 世紀にも存在していたと考えられるが、それを現代の子供と同じように見、考え、感じ、扱うようになったのが 16、17 世紀あたりならば、たしかに同アリエスの書名(『<子供>の誕生』)が示しているように、現代文化のなかで考えられているような「子供」は 16、17 世紀あたりに「誕生」したといえるであろう。

13 歳の身体はいつの時代にもあったであろうが、それを「大人」とみなすか「子供」とみなすかは社会・文化的な問題である。なお、石上(2018a)において、“黒船”で日本に來航したペリーが、それ以前に日本に存在していなかった「近代家族」の概念を抱いて、日本社会を見ていた可能性があることを指摘した。今の私たちがイメージする「家族」である「近代家族」もある時期に誕生したのである。

現代の自国の文化・ことばを、上記のように過去や外国の文化・ことばと比較することによって、文化やことばについて学ぶことができるであろう。この意味で、外国語や外国の文化を学ぶ意義

は大きいと考えられる。

3.3 「世界」の「虚構性」を学ぶ——複数の世界制作の比較を通して

上で、しばしば「世界」ということばを用いたが、この点に関して哲学者の N. グッドマンの理論を紹介する。グッドマン(1987, p.160)は「世界制作(worldmaking)」という考え方を展開し、「ことば、数字、絵、音、あるいはその他、あらゆる媒体におけるあらゆる記号を使ったこのようなヴァージョンの制作によって、さまざまな世界が制作される」と述べている。つまり、彼が考えている世界制作における世界は、「記号世界」のこのようである。新聞記事も一つの「世界」であるし、歌謡曲の一曲も、一枚の絵画も一つの「世界」といえる。

グッドマン(1987, pp.11-26)は、世界がいかにかに制作されるかについて、七つの具体的製法(processes)について述べている。(1) 合成(composition)と分解(decomposition)、(2) 重みづけ(weighting)、(3) 順序づけ(ordering)、(4) 削除(deletion)と補充(supplementation)、(5) 変形(deformation)である。ここでは、これらの説明を行う余裕はないが、石上(2018a)に詳しく論じている。

世界の制作者は、これらの製法を用いて記号世界を制作するが、その世界の読解者は、どのような製法が用いられているかを念頭において読解をすすめれば、制作者の世界を深く理解できよう。さらに、製法が明示されているので、容易に深い読解ができよう。研究者にとっては、それらの製法は、分析のための指針にもなる。

グッドマン(1987, p.11)は「世界制作はわれわれの知るかぎり、つねに手持ちの世界から出発する。制作(making)とは作り直し(remaking)なのだ。」と述べているように、彼の「世界制作」理論の特徴の一つが「作り直し」という考え方である。映画の世界でもよくリメイク版が制作される。日本ではやった映画が、ハリウッドでリメイク版として制作されることはよく知られている。

「作り直し」という考え方は、間(相互)テキスト性と言われているものと近い考え方であろう。間テキスト性については、いろいろな考え方があるが、私はあらゆるテキストが網の目のように関係している状態のことを指していると考えている。つまり、ある一つのテキストは、他のさまざまなテキストの影響を受けていることになるし、当該テキストも他のテキストに影響を与えていることになる。

A 世界が B 世界として作り直された場合、二つの世界の関係は、「全体的類似性」、「一方向的影響」として特徴づけられるであろう。いっぽう間テキスト性の場合、テキスト間の関係性において全体的な類似性や一方向性はみられないであろう。

世界が言語記号によって制作されているならば、それは一種のディスコースでもある。そのため、言語によって制作された世界はディスコースとして読むことができる。しかし、その文章を読むとき、ディスコースとして読むか、それとも世界制作されたものとして読むかでは、幾分異なっている。第一の違いは、現実世界との距離であろう。前者においては、バーが「一つの出来事——中略——について描写された特定の像」と言っている。いっぽう、グッドマン(1987, p.7)は、「数多くの異なった世界＝ヴァージョンは、唯一の基盤へ還元できるという可能性を要求ないし前提することなく、独立の意義と重要性とをもつ」と述べている。「唯一の基盤」というのは、「実在する唯一の現実」といったもののことを指しているのではないだろうか。つまり、ある事件が起きても、唯一の真実を想定しないということではないだろうか。バーのディスコースの方が、グッドマンの記号としての世界よ

りも、現実世界との距離が近いようだ。別の言い方をすれば、グッドマンの記号世界は、現実世界と切り離れた「世界」として考察しようとしているように思われる。

現在の「メディア英語学会」の旧称は「時事英語学会」であった。「時事英語」の方が、「メディア英語」よりも現実世界により近いスタンスでの研究であったと私は考えている。時事英語研究においては、当時、「ディスコース(言説)」という用語はあまり使われていなかったようだ。ただし、「メディア英語」への名称変更が近づいた頃には、だいぶ増えていたと思われる。もしそうなら、学会設立の初期・中期の「時事英語」の論文は、バーの「ディスコース」よりもさらに現実に近いスタンスでの研究であったと思われる。これらの現実に近いスタンスのアプローチが間違っているとは考えていないが、もっと離れて、独立した世界として研究するアプローチも積極的に採用してもよいと考えている。なぜなら、記号によって制作された世界には、現実とは別の次元の法則が働いていると考えられ、その法則を見出すためには、現実世界との“縁”をいったん切ることによって、より純粋に記号世界に近づくことができるのではないかという期待があるからである。そして、純粋な記号世界の分析が何らかの成果を上げることができた時点で、“現実世界”と記号世界を比較するのも楽しみである。とくに記号世界から“現実世界”を眺めるということは非常に興味深いと思われる。

第二の違いは、グッドマン理論の「作り直し」という考え方である。この考え方には、別の記号世界が前提され、それとの比較が同理論に組み込まれている。バーの「ディスコース」には、そのような比較の視点は含まれていない。そのため、グッドマン理論を用いることによって、当該テキストは、それ以前の類似テキストと比較され、その特徴を際立たせることができると考えられる。なお、グッドマン理論に基づいた比較を中心とした研究には、石上(2018b、2018c)がある。これらの発表においては、オバマ大統領とトランプ大統領の大統領就任演説の違いをディスコース分析とグッドマン理論を用いて明らかにした。トランプ大統領の就任演説を、オバマ大統領の演説の「作り直し」と考え、その差異を研究したのである。一般的な比較よりも、その製法を基礎にした分析のほうが、それを定石とし、分析の指針として用いることができ、分析しやすいと考えられる。もちろん、文学などの原典とその翻訳ヴァージョンを世界制作というアプローチから比較することも有意義であろう。

グッドマン理論の「作り直し」という考え方から外れるが、七つの製法を基礎にした、外国語という言葉記号で制作された世界と日本語の記号世界の比較研究は有意義であろう。例えば、自然災害に関するニュース記事や交通事故に関する記事を比較することによって、世界制作の仕方および制作された世界の違いが明らかになるであろう。これらは、比較文化研究の重要な一分野になる可能性がある。

外国語を学ぶことによって、日本語と外国語による世界制作の違いを学ぶことが可能になる。それは、ことばとは何か、文化とは何かということ、そしてそれらの「虚構性」を学ぶことに通じるはずである。

記号によって制作された世界も、“現実世界”を構成しているので、さまざまな国の人々の世界制作の仕方の特徴を知るとは、それらの人々が制作している“現実世界”ばかりでなく、私たちが制作している“現実世界”を知ることにも通じることになる。

グッドマン理論は、一見すると難解だが、製法は七つと少なく、ある程度用いやすいので研究や教育現場で利用する価値があると思う。七つの製法は、文章の読解のさい、読解のための基本的

論点・視点を提供してくれるので、教育現場に導入しやすいと考えられる。ただ残念なことに、この世界制作を教えるための教材や教授法は開発されていないようだ。逆に言えば、大きな可能性があるということができる。

なお、グッドマン理論は、私には、あいまいな点や不明な点があるし、七つの製法が完璧なものであるという保証はない。今後、同理論を用いた研究を深め、同理論そのものの進化もはかるべきだと考えている。

4. 社会・文化のモデルとしてのことば

高名な人類学者のレヴィ＝ストロース(1974, p.37)は、「言語学が社会科学に属することは異論の余地がないが、それは社会科学の全体の中で例外的な地位を占めている」と指摘し、その「例外的な地位」について、次のように述べている。

それ(言語学)は他の社会科学なみの社会科学ではなく、他のものをはるかに引きはなして最大の進歩を遂げた社会科学である。それはおそらく、科学の名を主張することができる唯一の社会科学、実証的な方法を明確に定式化すると同時に、みずからの分析する事実の本性を認識するにいたった唯一の社会科学であろう。(レヴィ＝ストロース、1974, p.37) (カッコ内は筆者)

レヴィ＝ストロース(1974, p.39)は、言語学のなかで、とりわけトルーベツコイの音韻論に関心を示し、それと人類学の重要な研究分野である親族関係との類似性を指摘し、次のように述べている。

親族関係の諸現象は、言語の諸現象とは異なる次元の現実^レに属するが、それらと同一^レのタイプの現象である。社会学者は、音韻論によって導入された方法に形式^レの上で(内容的にとはいわぬまでも)類似した方法を用いて、言語の科学が最近になしとげた進歩に似た進歩を、みずからの科学に遂げさせることができるだろうか？(レヴィ＝ストロース、1974, p.40)

上記の問いに対して、レヴィ＝ストロース自身が、親族、神話、料理等の研究に言語学的手法を取り入れ、次々にその成果を発表した。

レヴィ＝ストロースの考え方が私たちに教えてくれるのは、言語学の研究手法が、文化現象の分析や説明の類例やモデルとして利用できる可能性である。

次項(4.1)では、レヴィ＝ストロースのいう「タイプ」や「形式」を「構造」と考え、「ことばの構造」を「文化の構造」を説明するためのモデルとして利用する方法について述べる。さらに、その次(4.2)に、ことばの「客観性」や「力」をモデルとして考え、社会・文化現象を説明するために利用できることについて述べる。

4.1 ことばの構造と文化の構造——「構造」概念とさまざまな構造の学習

私たちは、中学の英語の授業で「文法」に出会う。文法を学習することによって、とくにことばに

構造があるということを学ぶ。もちろん生徒が、文法のある側面を「構造」として理解しているか、「規則」として理解しているか、たんに「そんなもんだ」として理解しているかは、人によるであろう。

「構造」という概念を理解し、自分のものにすることは有用であろう。さまざまな社会・文化現象を考えるときに、この構造的視点からものを考えることができるようになることは、ものごとを考える手段が一つ増えることになる。外国語を学習するさいに、文法学習を通じて、この「構造」という概念そのものを学ぶことができる。

また、文法学習を通じて、さまざまな「構造」の実例も学ぶことができる。例えば、いわゆる5文型では、「主語＋動詞」という「順序構造」が大事であることを学ぶであろう。

時間は連続しているが、英語のなかの時間は、時制として、「過去、現在、未来」として単純に分節(構造化)されている。私たちは、未来を事前に経験することはなく、想像上の時間に過ぎないが、これも構造に組み込まれている。さらに、現実のない仮定的事象を表現するときは、この“時間”に複雑な“細工”をする。そしてこの細工もしっかり構造化されている。

名詞が「可算名詞」と「不可算名詞」に分類(構造化)されていることに驚く中学生は多いだろう。そして私たちは、英語の言語的世界においては、日本と違って、リンゴとバターが文法的に異なったカテゴリーに分類(構造化)されていることを理解しようと努める。

学校教育の現場では、類似の語彙の意味がある程度構造化されていることについては、あまり教えてもらえないであろう。鈴木(1973, p.12)は、意味の「構造的把握」について、“drink”を例に次のように述べている。

英語の drink とは「人の体を維持するに役立つような液体を、口を通して体内に取入れる行為」を言うだけでもすれば、すべての正しい drink の使い方を、あます所なく押えることができる。そして同時に、これは drink と、take や smoke や swallow などのような、同じく、口を通して何かを体内に摂取する行為に関する一群の動詞との構造的な相違を浮彫りにすることにもなる。

文法ばかりでなく、意味の領域にも構造化がみられるというのである。類似の語彙を構造的に学べば、その適切な使用が可能になるであろう。さらに、文化の次元においても、意味構造や価値構造を見出すことができると思われる。

レヴィ＝ストロース(1980, pp.42-3)は、次のように母音と子音を重要な対立関係(構造的関係)としてとらえている。

世界中のすべての言語において、音素間の対立の複雑な体系というものは、より単純でまたすべての言語に共通な一つの体系、すなわち子音と母音との間の対比を、さまざまな方向に発展させて作りあげているにすぎない……。

レヴィ＝ストロース(1980, pp.41-63)は、この対立関係をもとに、文化の次元の現象である料理の分類についての構造的分析を行ったのである。

鈴木(1973, pp.1-4)は、レヴィ＝ストロース(1980)とは異なったアプローチから、西洋料理と日本

料理の食べる順序の違いについて、構造的に考察し、前者を「通時的展開」、後者を「共時的展開」として説明している。さらに、鈴木(1973, p.4)は、ある一つの文化的な単位(項目)は、「構造」によって意味づけされると、次のように述べている。

自分の文化にある文化項目(たとえば或る種の食物)が、他の文化の中に見出されたからといって、直ちにそれを同じものだと考えることが誤りなのは、その項目に価値(意味)を与える全体の構造が、多くの場合違っているからである。

例えば、数字の「8」は、どこの国にもあるだろうが、日本では「八」と書かれ、その形象が末広がりとして捉えられ、おめでたい数字として価値づけられている。つまり、たんなる数字が、漢字文化の形象構造という「全体構造」のなかに位置づけられ、その影響を受け、他の文化のなかの数字の価値(意味)とは異なった意味づけがなされているのであろう。

外国語の学習を通して「構造」という概念を獲得し、それをモデルとすることによって、自国の文化や異文化を構造的に考えることができるようになり、その理解も促進されると考えられる。ちなみに、文化現象を構造として考えた研究には九鬼(1979)や土居(1976)が有名である。

4.2 ことばの「客観性」・「力」と社会・文化の「客観性」・「力」

バーガー(1979, p.18)は、「・・・、社会に欠くべからざる威圧性は、社会統制のもつ機構にあるのではなく、自らを築き上げ、自らを現実として押しつける社会の力にこそ潜むのである。その模範的な事例は言語である」と述べている。つまり、「威圧性」に関しては、社会と言語の間に共通性があるというのである。ここでいう「威圧性」とは、例えば、英語には、その話者に、話す対象物が可算名詞なのか、それとも不可算名詞なのかの区別をつけさせる、主語が三人称単数の場合、動詞の語尾にsをつけさせる、というような意味での「威圧性」があるというのである。外国語学習とは、この威圧性を学ぶことである、という言い方ができよう。そして、言語における「威圧性」は、社会の「威圧性」の「模範的な事例」であるという。つまり、社会の「威圧性」を説明するのに、言語の「威圧性」がモデルとして利用できるというのである。

私たちは、日本語を話すとき、書くときにこの「威圧性」にほとんど気がつかないであろう。それはあまりにも日本語が、話者にとって“自然”になりすぎているからであろう。ためしに学生・生徒に、まちがった日本語をしゃべるように指示してみれば、普通の日本語をしゃべるよりは難しいことに気づくであろう。「間違った日本語」をしゃべることは、日本語のもっている「威圧性」に反抗していることになり、そのために難しいと感じると思われる。

また、バーガー(1979, p.19)は、注のなかで「言語を社会現象の客観性を示す範例と理解するのも、やはりデュルケムに由来する」とも述べている。なお、この「客観性」について、バーガー(1979, pp.18-9)は、「・・・、英語はひとつの客観的現実として個人に現前し、彼はそれをそのように容認し、あるいはその結果に苦しまねばならない。その諸法則は客体的に与えられる」と説明している。

以上のことを本論の流れに沿って簡単に言い表せば、<ことばは、社会を知るためのモデルになる>ということである。

さらに、バーガー(1979, p.10)は、文化には物質的なものと非物質的なものがあると述べ、「・・・、社会は、いうまでもなく非物質的文化の重要な部分にはほかならない」と社会と文化の関係について言及している。バーガー(1979, p.10)は、文化と社会の関係について「文化の一要素としてのみ、社会は人間の所産として非物質文化の性格を十分に享受するのである」とさらに明確に述べている。このことから、さきの言い方は、<ことばは、社会・文化を知るためのモデルになる>と改めることができそうである。もちろん、ありとあらゆる社会・文化現象をことばをモデルとして説明できるとは考えていないが、「どの程度できるか」については、今後の研究が俟たれる。

前項では、「構造」に関してことばが文化のモデルとして役に立つという考え方を示したが、ここでは、ことばが文化・社会のもっている「客観性」や「力」の説明のモデルとして役立つであろうことを、提案しているのである。ことばは、あまりにも“自然”すぎて、あたかも自分自身に肉化しているかのように感じてしまうが、じつは厳然とした客体であって、常に強い力で、私たちに影響を与えているというのである。社会・文化も同様の力を行使しているのである。このように、社会・文化を知るためのモデルとしてのことばの学習には、上記のように外国語学習が適していると考えられる。あまりにも“自然”すぎるために、母語には感じるできない「威圧性」という「力」が、外国語の学習を通して、その「客観的」「存在」が明らかになるのである。

言語学の「例外的な地位」の利用について、ここでは「構造」と「威圧性・力」というわずかな例についてしか述べることができなかつたが、すでに述べた「ことばの虚構性」についての考え方が、「文化の虚構性」の説明のモデルになるであろう。おそらく、言語学の成果にはまだまだ多くの資源が眠っていると思われる。これらを発掘して、社会・文化現象の教育・研究に役立てる方法を開発していくことが望まれる。

5. おわりに

現代が外国語教育・学習の危機であるという認識のもとに、外国語学習の意義づけの再定義を行うことが本稿の目的であった。この小論では、下記のように大きく三つの提案をした。

- (1) 知的訓練として外国語を学ぶ
- (2) 外国語学習を通してことばと文化について学ぶ
- (3) 社会・文化のモデルとして外国語を学ぶ

このような提案は、教科書、教材、教授法等の開発がなければ意味がない。もし開発を行おうとすれば、かなり大がかりなもの——おそらく学際的なもの——になるであろう。なお、この開発に必要な研究領域は、ある程度日本メディア英語学会と日本通訳翻訳学会と重なる部分が多いので、われわれの奮起が必要となるであろう。

【注】

- 1) 本稿は、2018年9月7日に開催された JAMES 夏季セミナー & JAITS プレカンファレンスにおいて

「今後のメディア英語研究と通訳翻訳研究の展望」と題して発表したときのハンドアウトに大幅に加筆したものである。

- 2) 石上(2018a)において、幕末に日本に來航したペリーが描き出した日本という“異国の世界”を考えてみた。

【参考文献】

- アリエス、P.(1980)(杉山光信、杉山恵美子訳)『<子供>の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房
- 石上文正(2018a)「より深く、より高く読むために—世界制作と学術的視点を用いて」*MEDIA, ENGLISH AND COMMUNICATION*、一般社団法人日本メディア英語学会、No. 8 (pp. 29-47)
- 石上文正(2018b)「N. グッドマンの「世界制作」理論の紹介と応用—オバマ大統領とトランプ大統領の世界制作について」日本メディア英語学会、通算第60回記念大会(2018年10月21日、東京学芸大学)
- 石上文正(2018c)「『神話』としての大統領就任演説にみられるトランプ大統領の“型破り”」日本メディア英語学会、中部地区第72回研究例会(2018年12月9日、愛知淑徳大学)
- 加賀野井秀一(監修)(2006)『あたらしい教科書 3 ことば』東京:プチグラパブリッシング
- 九鬼周造(1979)『「いき」の構造』岩波書店
- グッドマン、N.(1987)(菅野盾樹、中村雅之共訳)『世界制作の方法』みすず書房
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波書店
- ソシュール、F.(1972)(小林英夫訳)『一般言語学講義』岩波書店
- 竹内芳郎(1981)『文化の理論のために—文化記号学への道』岩波書店
- 坪井洋文(1979)「人の一生」(『日本を知る小事典1 冠婚・葬祭』所収) 社会思想社
- 土居健郎(1976)『「甘え」の構造』弘文堂
- バー、V.(1997)(田中一彦訳)『社会的構築主義への招待—言説分析とは何か』川島書店
- バーガー、P. L.(1979)(藺田稔訳)『聖なる天蓋—神聖世界の社会学—』新曜社
- 平泉渉・渡部昇一(1995)『英語教育大論争』文藝春秋社
- レヴィ=ストロース、C.(1974)(佐々木明訳)「言語学と人類学における構造分析」(『構造人類学』所収)みすず書房
- レヴィ=ストロース、C.(1980)(西江雅之訳)「料理の三角形」(『レヴィ=ストロースの世界』所収)みすず書房

